

北部ケニア干ばつレジリエンス通信

The Project for Enhancing Community Resilience Against Drought In Northern Kenya (JICA ECoRAD Project)

北部ケニア干ばつレジリエンス向上のための総合開発及び緊急支援計画策定プロジェクト
2014年3月特別号(1/5)：自然資源管理・家畜バリューチェーン（マルサビット）編



2012年2月に開始された本プロジェクトでは、マルサビット県において、「持続可能な自然資源管理」、「家畜バリューチェーンの改善」、「生計多様化」、「平和構築」の各プログラムを実施中です。本号では、プログラム3の発行に合わせ、各プログラム事業の主なトピックについてご紹介致します。

持続可能な自然資源管理

自然資源管理プログラムでは、牧畜民の干ばつレジリエンス向上に資するため、下記の水源地施設の建設・改修事業を実施しています。

施設	場所、コミュニティ	進捗
Rock Catchment	Ngumit	完成
Pipeline System	Arapal	完成
Water Pan	Hurry Hills, Turbi, Dirib Gombo, Gar Qarsa, Halo Girisa	完成最終工 ツグ段階
Solar Power Pumping System	Korr, Kubi Qallo, Shurr	完成

村独自の開発資金事業始まる！ 既存ディーゼル発電機による揚水システムの電源を太陽光発電に変更する事によって、燃料代を大幅に節約し貯蓄を増やす事が可能となりました。貯蓄の一部は施設の修繕維持費としてプールされております。また、マルサビット北郡 Shurr 村では、貯金の一部を「コミュニティ開発資金」として地域に還元することとなりました。昨年12月には、村の開発委員会(CDC)と水管理組合が中心となって村全体の会議を開き、この開発資金の第1回目の使用用途を協議しました。その結果、長年の懸案であった小学校の教室1棟増築(約40万円)が全員一致で決定され、早速実行に移される事になりました。

太陽光発電システムを導入 → 燃料代節約/貯蓄増 → 村人自身による建設作業

校舎完成！ (Jan 14)

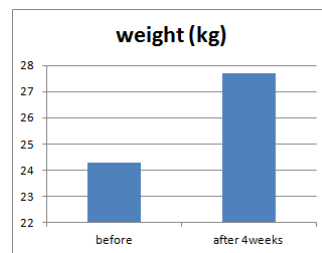
村人達は、自分達が徴収した水利用料金を使って、自らの意思でこの施設を完成させました。今後もこの様な経験と自信を積み重ね、外部からの支援にばかり頼るのではなく、自ら運営し得られる「開発資金」を使って、コミュニティ独自の開発事業やレジリエンス向上事業を継続的に実施していってくれるものと期待されます。

Water Pan の利用開始 今年初めの雨季で Water Pan には水が貯まり、雨季明けから各コミュニティでも利用を開始しました。利用で重要なことは、末永く綺麗に使うことです。本事業では、糞や堆砂の除去、水飲み場の設置などの活動を利用者が行なう様、水組合と共に利用者への教育・啓蒙活動に力を入れております。

←自分の家畜が出した糞を池周辺から除去する利用者。一利用者が伝統的な meer を設置。家畜が池に入り糞尿で水を汚染する事を防ぐ工夫。



肥育開始@Feedlot 本プロジェクトでは豊富な泉を有する Kalacha 村を対象に、灌漑による牧草栽培とそれをういた家畜の肥育による付加価値増を目指した Feedlot 事業を実施しております。施設が前雨季前に完成し、今雨季で牧草が順調に育ち始めております。



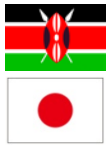
4週間肥育した後の体重の増加(20頭の平均)は、24.3kg/頭 → 27.7kg/頭と、3.4kg増、14%増でした。また、うち7頭が販売されましたが、値段は、肥育前の Ksh2,414/頭から Ksh3,028/頭と、ksh.614増、25%増となり、順調な滑り出しとなっております。

本プロジェクト実施のモットー

チームモットー「C.A.R.P.」:

Consideration, After-care, Repeat, Perseverance





北部ケニア干ばつレジリエンス通信

The Project for Enhancing Community Resilience Against Drought In Northern Kenya (JICA ECoRAD Project)

北部ケニア干ばつレジリエンス向上のための総合開発及び緊急支援計画策定プロジェクト

2014年3月特別号(2/5)：生計多様化(マルサビット)編



マルサビットカウンティにて実施中の生計多様化プログラムですが、本プログラムを開始してからおおよそ1年が経過しました。本号では、先号と同じく現在までの進捗と今後の予定をご報告します。

マルサビット県にて実施中の生計多様化プログラム

既にご報告の通り、JICA's ECoRAD Approachとして家畜利用型(ヤギ事業、養鶏)、地域資源利用型(塩、レイシ・蜂蜜事業)の2類型を意識し、昨年2月から下表の通り、合計6地区において合計27グループに対し4種類のパイロット事業を行っています。

パイロット事業対象地区	生計多様化事業内容	対象グループ数	プロジェクトからの主な投入
北部: Kalacha	塩事業	1	起業家/VICOBA トレーニングとメンタリング活動
北部: Kalacha	ヤギ事業	4	ヤギ、技術/VICOBA トレーニングとメンタリング活動
中央部: Dakabaricha/Jirime	養鶏事業	8	鶏と鶏舎(代表者のみ)、技術/VICOBA トレーニングとメンタリング活動
中央部: Gar Qarsa	ヤギ事業	9	ヤギ、技術/VICOBA トレーニングとメンタリング活動
南部: Arapal	ヤギ事業	2	ヤギ、技術/VICOBA トレーニングとメンタリング活動
南部: Neurnit	レイシ・蜂蜜事業	3*	起業家/VICOBA トレーニングとメンタリング活動

*: 個人で参加した5人が追って1グループを形成し合計3グループ

パイロット事業の主な進捗

ヤギ事業

2月時点で、子ヤギは21頭(雄ヤギ10頭、雌ヤギ11頭)となり、昨年8月時点の13頭(うち雌ヤギ6頭、雄ヤギ7頭)から増加、初期導入ヤギを保有しているメンバー以外、現時点で5名に雌の子ヤギが配布されました(8月の1名から4名の増)。環境要因等から流産などもあり当初想定よりも時間がかかっていますが、現在約40頭の親の雌ヤギが妊娠しているとの報告もあり、今後モニタリングと適宜アドバイス提供を継続し、更なる子ヤギ増、次メンバーの受領ケース増を期待したいと思います。

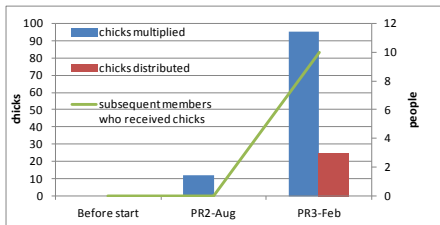
さて、40人のArapalのグループでは、うち35人をプロジェクトが本メリーゴーランドの対象として選定した経緯があったのですが、グループ独自の判断として除外された5名のメンバーも配布の順番に取り込んだり、より回転が速くなるような小さなサブグループを作るといった独自の裨益分配システムを作っていることがわかりました。このように、外部者の提供したルールをコミュニティが独自に発展させている事例が観察されています。

養鶏事業

先号ご報告したメンバーの未熟な孵化技術について、その後プロジェクトにより技術トレーニングを実施、またプロジェクトスタッフによる日々の訪問・アドバイス活動により、現在95羽の雛がかえり、うち25羽が計10名のメンバーに配布され、8月段階での雛24羽(0人配布)から大きな改善となりました。

次メンバーへの雛の配布について、

2番目に子ヤギをうけたメンバーと、他のグループメンバー(Arapal)

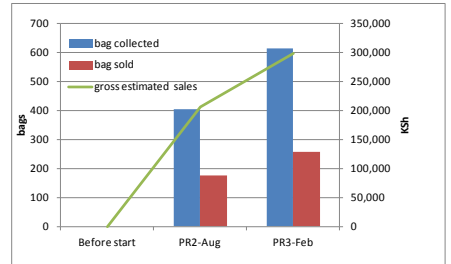


次メンバーへの配布(Dakabaricha)

鶏の提供を受けた代表者が雛をかえし次メンバーへ配布するルールでしたが、改良種であるSassoは雌が卵を抱かず、ローカル種の雌を活用して孵化させる必要があります。これを逆手にとったあるグループが、次メンバーに卵の状態のまま配布したところ、ローカル種を保有している次メンバーが速く大量の雛をかえすことができました。ヤギ事業と同様に、コミュニティ自身の工夫によって事業の進捗が改善された事例です。

塩事業

塩ビジネスは昨年の乾期に支援を開始し、これまで615袋を集め、515袋を開拓したマーケットに運び、うち258袋を販売、総売上(予想)はおよそ30万シリングになりました。他方、各マーケットから売上金を完全に回収できていない、ビジネスの記録が十分でないなど改善しなければならない点もありますが、ビジネスを通じグループの繋がりも強化され、昨年末クリスマスシーズンにはグループでビジネスの成功を祝うパーティーを行うなど、プラスの変化が見られています。



レイシ・蜂蜜事業

特に蜂蜜事業について、支援開始当初プラスチック容器の導入支援を行ったのですが(購入費用はグループが出しています)、支援前はソーダの空き容器を回収・洗浄し蜂蜜を入れ販売していたので販売数も限られていたものが、この容器によって蜂蜜販売が促進され、3つのグループに合計3,690個導入した内、実に9割近くの3,198個が現時点で売れています。

また、先進事例を見せる為にスタディーツアーを実施、グループの代表者が、ナンユキのガムレイシ取り扱い会社、またケリオ深谷開発公社の蜂蜜事業を見学、それぞれ新販路の開拓や、現技術水準を大幅に逸脱しない範囲において蜂蜜濾過技術で参考となる点を学ぶなど、勉強となったようです。

今後の予定

引き続き、モニタリング、適宜のアドバイスを提供するとともに、PFS (Pastoralist Field School) アプローチによるグループ同士での学びあい等の支援を継続し、コミュニティのSelf Reliance (ニスワヒリ語で“Kujitegemea”)を促す活動を実施していきます。

尚、開発の実務者としての我々は、限られた期間の中で計画した事項を実施・実現しなければならない性質上、どうしても「こうしなさい」とおしつけがちになる面は否めません。他方で、上記で見たように、コミュニティの住民達は我々外部者が伝えたルールなどを自分達のマネージしやすい形に適宜変更を加えながら、たくましく生活しています。

このように、北部ケニアという厳しい環境を生き抜いてきたコミュニティ住民の知恵を借りつつ、事業実施を通じ学ばせて頂いている、という気持ちを忘れないよう、謙虚な気持ちでコミュニティ住民に向き合い、パイロット事業終了にむけて活動の集大成を図っていきたいと思います。



マルサビット小売店におかれたNeurnitグループの蜂蜜

ケリオ深谷開発公社見学(Neurnitグループ)



北部ケニア干ばつレジリエンス通信

The Project for Enhancing Community Resilience Against Drought In Northern Kenya
(JICA ECoRAD Project)

北部ケニア干ばつレジリエンス向上のための総合開発及び緊急支援計画策定プロジェクト

2014年3月特別号(3/5)：干ばつ管理委員会（トゥルカナ）編



トゥルカナの人々はトゥルカナ特有の彼らの文化があり、一方で、干ばつの緊急支援を含む外部援助が大量に投入されてきていることから、援助を通じて作られてきた習慣があります。本プロジェクトの柱でもある干ばつ管理委員会の設立とそれを中心としたコミュニティの干ばつ対策について、これらの並立する文化習慣にどのようにアプローチしていくかを考えていきたいと思えます。

トルカナにおける CMDRR アプローチの応用

トゥルカナでは、ここ数十年にわたり干ばつ被害に対して大量の外部支援が入ってきました。これに対し、近年援助機関では緊急援助からレジリエンス向上に支援の方向転換を試みようとしています。数十年前にわたり緊急支援を受けてきた人々の意識と生活は、緊急援助ありきのスタイルに適合してきている様にも見て取れます。このような状況の中、本プロジェクトでは、干ばつに対し脆弱な状況を改善するにはどのようなアプローチが適しているのか、また数々のドナーが同様のアプローチを試している中、CMDRR アプローチはどのように機能しているのか、手探りの中地域の人々と葛藤しています。

私達は、コミュニティの自立発展的な防災活動とはコミュニティがすべてを自分たちでしなければいけないことではなく、外部リソースもうまく活用して自分たちの望む状況に近づいていくことであると捉えます。コミュニティの自主的な活動の必要性が強調される中、干ばつ状況が起きる限り緊急援助がなくなるとも考えにくい。外部支援に頼らない活動と緊急援助は両立するのでしょうか。このような状況において、今できることとしては、コミュニティが外部支援をうまく活用すること、そして外部支援がない場合にも自分たちで状況を改善できる能力を付けることでしょうか。

干ばつ管理委員会支援活動

ECoRAD プロジェクトでは、干ばつに備え地域の体力をつけるための投入に加え、外部支援の有効な活用と外部支援がない状況での地域による自主的な活動ができるよう、干ばつ管理委員会の強化を通じて、



支援しています。これまで多くのプロジェクトが干ばつ関連の委員会を研修し、物資や資金の提供を行ってきただけから、当初干ばつ委員会の研修を行った時には、手当や資金の支援要求が強く、研修が中断する場合もありました。しかし、

継続的な話し合いを通じて、プロジェクトの方針に理解を示す人が出てきて、その後の活動にまでつながってきています。

干ばつ委員会の研修では、CMDRR 研修で作成したCAP の外部支援がなくてもできる活動について、干ばつ管理委員会が自主的な活動を実践していく環境と土台を作ることを目的として実施しました。これまで多くの援助を通じてコミュニティは開発計画を作ってきていますが、計画で終わっているものが少なくなく、外部支援なしでできる活動として立てた計画も、きっかけがなければ実行に移らなくなってしまうことが懸念されました。研修では、干ばつ早期警戒システム(EWS)に基づき、彼らが自分たちで実践できる干ばつリスク削減活動を紹介し、彼らが伝統的、慣習的に行っている干ばつ時の対応と合わせてコミュニティにどう役に立つのか考えてもらいました。さらに実践したいと思った活動を、具体的にどのようにしたら実行に移せるのか話し合い、予備演習を行いました。一貫して、活動は彼ら自身のものであることを強調し、プロジェクトからの支援を期待しない実施方法を考えてもらいました。もちろん、国際ドナーがついているプロジェクトがお金や物をくれないというのは理解し難く、はじめは反発が大きく受け入れられませんでした。しかし、研修終了後には、自分たちで何か実施しようという意欲もみられてきました。研修で立てた計画は、委員会が自主的に実践することを促し、実施の際には彼らの活動にプロジェクトはオブザーバー参加しました。これまでに以下のような活動が、委員会主導で実施されてきています。

- 干ばつ早期警戒システム (EWS) に係るコミュニティの啓発
 - ・ NDMA によって評価される干ばつ警戒レベルと伝統的な干ばつ予測を考慮した干ばつレベルに応じた対応策の実践
 - ・ 平常時の牧草管理と牧草保存
 - ・ 干ばつに備えた家畜管理 (家畜の売却と再購入)
- 各活動 (水管理や牧草管理) の実務担当委員会の選出
- 地域にある他の委員会やグループとの協力体制の構築
- 牧畜栽培・保存活動
- 牧草管理のための放牧地区の設定

現時点では具体的な活動のための準備段階としてのものが多いですが、自分たちのリソースで自主的に活動を開始したことは、変化への第一歩であると考えられます。

現在雨季を控え、牧草栽培・保存活動は具体的な活動が始まっており、意欲を見せた4区では、栽培地の確保と家畜を入れないための柵の設置を行っています。プロジェクトは、これらのコミュニティによる自主的な活動がみられたところに対し、技術支援や持続性を高めるための初期投資を行っていく予定です。



コミュニティを代表する委員会？

干ばつ対策は牧畜民の生活の多様な側面に影響しうることから、干ばつ管理委員会は、地域の社会・経済開発を含む活動を調整する役割が期待される。しかしこの概念は開発援助側の概念であり、トゥルカナの社会の中で、どのように機能しうるのでしょうか。

トゥルカナコミュニティでは、伝統的な長老によるリーダーシップ (Elders) が強く残っておりますが、それは多くの場合、コミュニティ内の揉め事の仲裁などに代表される、「グループの調和を保つための役割」に限定されることが多いようです。当方が当初想像していた様な、「コミュニティの将来の発展に向けて、長老が旗を振り、コミュニティが一丸となってその方向を目指す」というシステムでは無いようです。一方で、近年の緊急開発援助や政府の制度の導入により、長老以外の地域を代表する取りまとめ役や委員会、グループなどが形成されてきました。ケニアの行政システムとして導入された Chief および Assistant Chief (伝統的長ではなく行政官のポストとして任命される) は、法的には Elders よりも強い権限を持っていますが、それ以外の委員会などは地域の代表として選ばれていても、現実的には Elder に相談し物事を決定する場合も少なくありません。委員会やグループを中心に行う活動は基本的に外部から持ち込まれた考えと制度ですが、コミュニティの人々は、利用可能な外部リソースを活用する手段として、それを自分たちの制度の中に取り入れてきているように思われます。外部支援の受け皿として選ばれた委員会は、活動の実施において求められる記録の管理のため、読み書きのできる人、特に英語やスワヒリ語が習得する若手が代表になることも多いようです。また、公平さの指標として求められる地域の代表性や女性の割合、青年層の巻き込みなどもよく理解されて取り入れられています (実質的な理解があるかは疑問ですが)。コミュニティはこれまで、援助機関や政府が求めているものを満たし、彼らの慣習と両立させながら取り入れてきていると考えられます。緊急開発援助が彼らの生活の一部になり、それを活用していくことが彼らの生計の手段である状況で、外部支援は物資の投入以外にも大きな影響を与えてきています。外部環境による変化は必ずしも悪いことではなく、これからも外部の影響を受けながら、彼らの生活様式の中に取り入れられる形で、新たな考えや方法が導入されていけば良いのではないのでしょうか。本プロジェクトでは、新たな視点や活動・技術を提案しながら、コミュニティが自分達で選択肢を広げ、彼らのやり方で適切なものを選択肢していただけるような支援を目指しています。



北部ケニア干ばつレジリエンス通信

The Project for Enhancing Community Resilience Against Drought In Northern Kenya (JICA ECoRAD Project)

北部ケニア干ばつレジリエンス向上のための総合開発及び緊急支援計画策定プロジェクト
2014年3月特別号(4/5)：自然資源管理・家畜バリューチェーン（トゥルカナ）編



トゥルカナ県での本プロジェクトの活動は、2013年4月より開始しました。マルゲット県と同じく、「持続可能な自然資源管理」、「家畜バリューチェーンの改善」、「生計多様化」の各パイロットプログラムを実施中です。本号では、プロジェクト3の発行に合わせ、各パイロット事業の主なトピックについてご紹介致します。

対象の11パイロットコミュニティ

本プロジェクトでは、水資源分布、牧草資源分布、道路アクセス、治安状況、各Districtへのバランスなどの要素を考慮し、下記のパイロットコミュニティを選定しました。

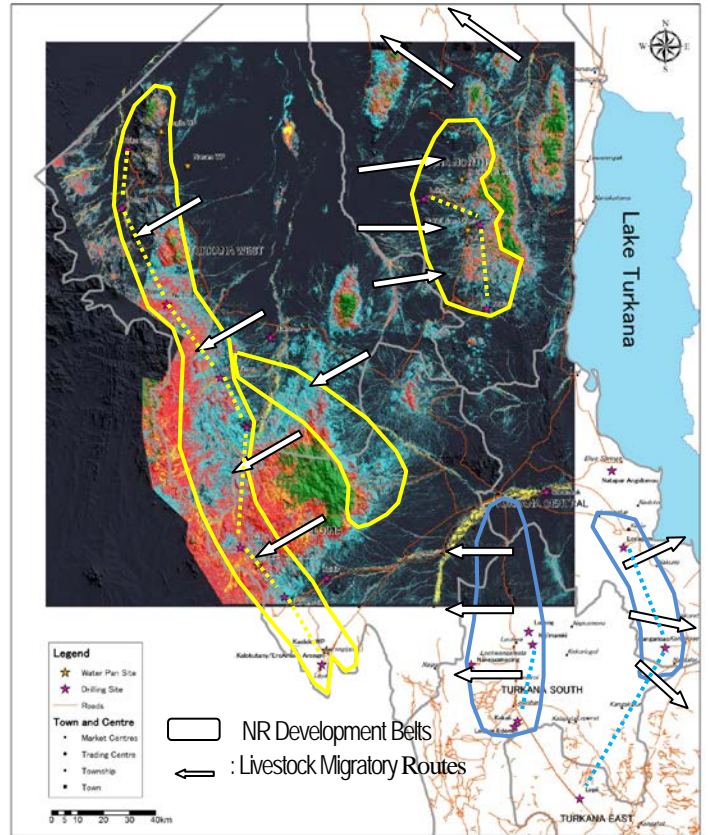
District	Sub-locations:	Location
North	1 MILIMATATU	YAPAKUNO
	2 KANGAKIPUR	KAERIS
West	3 LORITIT	LETEA
	4 LOKICOGGIO	LOKICHOOGGIO
Loima	5 LOKIRIAMA	LOKIRIAMA
	6 LORENGIPPI	LORENGKIPPI
Central	7 ELIYE	KANGATOTHA
	8 KERIO	KERIO
South	9 LOCHWAN-GAMATAK	LOCHWAN-GAMATAK
	10 LOKICHAR	LOKICHAR
East	11 LOPII	KOCHODIN

持続可能な自然資源管理

自然資源管理プログラムでは、牧畜民の干ばつレジリエンス向上に資するため、下記の水源施設の建設・改修事業を予定しています。

Water Pan 名	コミュニティ	種類
Kabilkeret Water Pan	Milimatatu Sub-location	Improvement
Nakisira Water Pan	Mogila Sub-location (Lokichoggio Location)	Improvement
Edukon Water Pan	Nanam Sub-location (Nanam Location)	Improvement
Kaalale Water Pan	Lorengippi Sub-location	New construction
Boreholes	20 sites	New construction

井戸掘削順調に進行 井戸掘削は14年3月現在10本掘削し、10本とも水脈に到達しました。**成功率100%**です。この中には、以前他トナによって掘削し失敗に終わった所が3村も含まれており、村民の喜びはひとしおです。井戸掘削前には村が責任を持って維持管理してくれるかどうかを問う集會も開いて、組織面強化も実施しております。



牧畜民の飼う家畜は、水と牧草の両方がある地域でしか生きられません。本プロジェクトでは、水資源と牧草資源、および家畜移動ルートを考慮して、上記地図の黄色で囲んだ地域を「自然資源重要開発地帯」と設定しました。今回の水源施設設置にあたっては、この開発地帯の中もしくは周辺を開発地点として選定することとしております。

家畜バリューチェーン

家畜バリューチェーンプログラムでは、家畜の販売活動を通して、牧畜民の干ばつレジリエンス向上に資するための活動を行います。

	活動	場所
1	Kerio 家畜市場改善事業	Kerio
2	家畜市場連携および活性化事業	Lodwar, Lokichar, Kakuma, Kerio
3	Reseeding 事業	Lokichoggio, Loritit

Reseeding 事業は、集落近くの土地を有刺植物の枝で囲み、そこに家畜が入らないようにして、内部草地の牧草を天水で育てる活動です。ここで栽培される牧草は、主に、乾季にも集落にとどまるミルク用家畜や子供家畜や、その他弱った家畜のために使われ、生育向上や肥育に資するものと期待されます。コミュニティが外部資金に頼ること無く行えるため、トゥルカナ県内でも自主的に設置しているコミュニティが見られます。本プロジェクトでも、コミュニティの自主性を尊重して活動を行なうこととしています。



他プロジェクトが行い良く運営されている reseeded 圃場



対象コミュニティの一つ Loritit. 村民が自主的に柵を作成



北部ケニア干ばつレジリエンス通信

The Project for Enhancing Community Resilience Against Drought In Northern Kenya (JICA ECoRAD Project)

北部ケニア干ばつレジリエンス向上のための総合開発及び緊急支援計画策定プロジェクト

2014年3月特別号(5/5)：生計多様化（トゥルカナ）編

マルサビットにおける生計多様化プログラムは鋭意継続中ですが、この度、トルカナでの活動がようやく開始されました。本号では、トルカナにおける生計多様化プログラムについてもご紹介します。

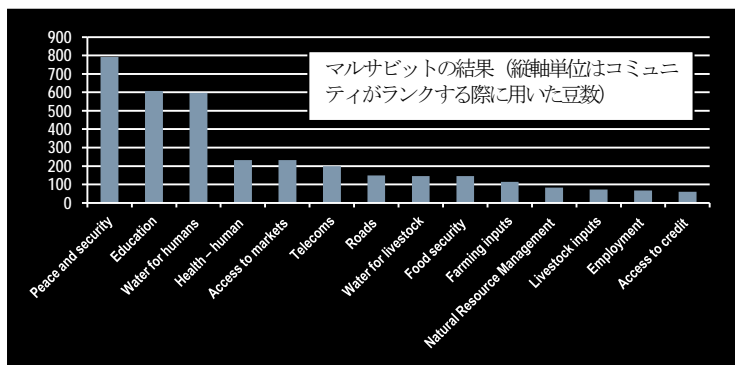
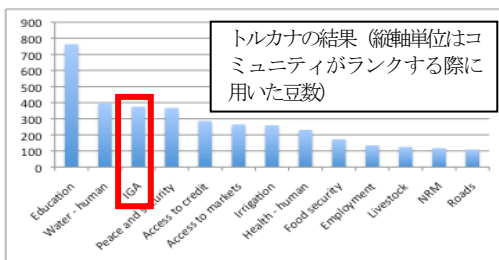
トルカナにおける生計多様化プログラムの検討

トルカナとマルサビットの社会経済状況の相違

トルカナはマルサビットと異なり、ロドワーには商用便が毎日2便就航、舗装道路が南北に縦断し、特にナイロビから Eldred, Kitale を経る A1 がロドワーを通過し Kakuma, Lokichoggio を経て南スーダンに至っています。舗装状態は場所によって一部悪化していますが交通量も多く、ロドワーの町自体の活性度もマルサビットと比べ高く、物資も安価で入手可能です。北部には難民キャンプとその支援団体でにぎわいを見せる Kakuma があり、また石油生産への投資が行われている場所がある(例：南部 Lokichar) 等、主たる経済活動の中心地が複数存在し、全般的なコミュニティの経済活動へのアクセスがよいと言えます、大きな河川や湖もあり、農業や漁業なども可能で、生計手段はそもそもマルサビットと比較して多様であると言えます。

UNDP の CoBRA Study の結果

UNDP の CoBRA (Community Based Resilience Assessment) Study の結果によると、トルカナでは、コミュニティが考えるレジリエンスにとって重要な項目として、教育、水の次に IGA (Income Generating Activities: 収入向上活動、ここでは小規模ビジネスの意) を挙げており、上記社会経済状況に合致した意見となっていると考えられます。同調査におけるマルサビットでの結果を比較すると、違いが浮き彫りになります(下図参照)。



上2図出典：CoBRA Workshop 資料 (2013年10月2日ロドワーで開催)

本プロジェクトでの検討

トルカナでも、マルサビットと同様 CMDRR (Community Managed Disaster Risk Reduction) における参加型災害リスク評価と計画立案が行われ、本プロジェクト対象 11 サブロケーションのコミュニティ住民から 2013 年 10 月頃に干ばつ被害軽減、生計多様化の為の意見が出され、CAP (Community Action Plan) に取り纏められています。また、チームによる現場踏査によるトルカナ地域概況把握も行い、これらの結果、先ほどの UNDP の結果と同様 IGA のニーズや、また地域固有の生計手段(農漁業等)に係るニーズがある



コミュニティへの説明会の様子(Lokiriana)

ことがわかりました。

CMDRR と生計多様化プログラムとの関係

尚、プロジェクトでは、開発モデルとして CMDRR アプローチによってサブロケーション(行政区の名前)毎に設立された干ばつ管理委員会(Drought Management Committee)が中心となり、コミュニティレベルにおける各種レジリエンスに資する活動が行われることが期されています。生計多様化は、個別グループや個人の活動の意味合いが強いことから、干ばつ管理委員会そのものが生計多様化活動を実施するのではなく、同じ行政区内のグループが生計を多様化する際に各種支援やアドバイスができるようになることが期待されています。

トルカナにおける生計多様化プログラム

以上から、主として IGA に係る活動を生計多様化プログラムのパイロット事業の中心に据えることとし、対象地選定については、他プログラムにおけるパイロット事業とのバランスも考慮しつつ、上記の検討で得られた事業対象地区における地域特性、また CAP 内のコミュニティの意見を踏まえ以下 5 つのサブロケーションで実施することになりました。既に、アシスタントチーフや長老、干ばつ管理委員会とともにそれぞれの地区における対象グループの選定も終え、合計 11 グループが選ばれています。

District	パイロット事業対象 Sub-locations:	生計多様化事業内容
West	LORITIT (Location: LETEA, Division: OROPOI)	IGA: 1 グループ 小規模天水農業: 1 グループ
Loima	LOKIRIAMA (Location: LOKIRIAMA, Division: LOIMA)	IGA: 2 グループ 干し肉: 1 グループ
Central	ELIYE (Location: KANGATOTHA, Division: KALOKOL)	漁業: 2 グループ
South	LOCHWANGATAK (Location: LOCHWANGATAK, Division: LOKICHAR)	IGA: 2 グループ
East	LOPII (Location: KOCHODIN, Division: LOKORI)	IGA: 2 グループ

上記は、マルサビットの活動で提案した「生計多様化」の開発アプローチモデルを念頭に、以下のような類型を考えています。

類型	生計手段
家畜活用型	畜産品加工(干し肉)
	IGA-家畜商売
	小規模天水農業
地域資源活用型	漁業
	IGA-小売店
必要サービス提供型 (トルカナでの新規追加)	IGA- その他 (サービス提供)

実施方法は、マルサビットにおける塩事業やレイシン蜂蜜事業の活動を反映させ、ビジネストレーニングや各種技術トレーニングを行い、その後プロジェクトチームによる適宜訪問、ビジネスアドバイスの提供を通じた OJT による育成を予定しています。

現在の活動

現在、それぞれのグループに対し、各種トレーニング(ビジネス、農業技術や漁業技術)を継続中です。

またトレーニングには、干ばつ管理委員会の行政区内における多様化知識の伝達機能に鑑み、委員のメンバーにも受講してもらっています。



ビジネストレーニングの様子(Loritit)

今後の予定

これら継続中のトレーニングを終了し、それぞれのグループの個別の生計活動を支援していき、2014 年後半まで本パイロット事業のモニタリングを継続する予定です。

トルカナでも始まった生計多様化プログラム。基本的には、住民ニーズや現在彼らが既に実施している活動をベースに組み立てており、これからコミュニティ住民達に教えてもらうことも多いことと思います。決して上から目線ではない、コミュニティに寄り添った活動を展開していくべく、プロジェクトスタッフ一同、頑張っています。